

## 人形土器の研究 —弥生時代の顔面造形—

櫻井 秀雄

(長野県教員委員会)

### I. はじめに

私は、『金大考古 73 号』に「弥生時代の人形土器」を草し、長野県佐久市西一里塚遺跡群から出土した弥生時代の人形土器について、その事例紹介と若干の私見を述べた(櫻井 2013)。今回は、管見の限りではあるが人形土器の集成を行い、改めて人形土器について考察してみたい。

### II. 西一里塚遺跡群から出土した人形土器

#### 1. 西一里塚遺跡群について

西一里塚遺跡群は、佐久市平塚地籍から岩村田地籍に所在し、餅田遺跡と西一里塚遺跡からなる。長野県東部にあたる佐久地方のほぼ中央にあたり、新幹線佐久平駅の南に位置する。標高は約 680～685 m をはかる。餅田遺跡については昭和 9 年に刊行された八幡一郎氏の『北佐久郡の考古学調査』において土製紡錘車と土製勾玉の出土が紹介されており、以来、弥生時代後期から平安時代に至る遺跡として周知されていた。昭和 40 年代後半に至ると、本遺跡群も含む佐久平地区圃場整備事業が計画されることとなり、それに伴い佐久市教委が、昭和 47 年には餅田遺跡を、昭和 48 年には西一里塚遺跡を発掘調査した。西一里塚遺跡からは弥生後期の竪穴住居跡 11 軒などの他、環壕 1 条が検出されたが、この弥生時代の環壕の発見は千曲川流域では初めてのことであり、大きな注目を集めた(佐久市教委 1973)。西一里塚遺跡については、その後も数次にわたり発掘調査が佐久市教委により行われている。

平成 16 年～18 年の 3 カ年にわたっては長野県埋蔵文化財センターによる中部横断自動車道用地内の発掘調査が実施された。この調査により人形土器 2 例が出土したのである。私は調査及び整理事業の担当者として報告書刊行まで携わることとなった。調査表面積は 25,350m<sup>2</sup> を数えた。調査対象地は幅約 50 m、長さ約 580 m にも及ぶため調査区は①～⑦区に分け、

用地収用等の兼ね合いからさらに細分した地区もあった(長野県埋蔵文化財センター 2012)。

検出された弥生時代の遺構は、弥生時代中期後半から後期の、竪穴住居跡 13 軒、円形周溝墓・方形周溝墓 25 基、木棺墓 2 基、土器棺墓 6 基、溝 45 条、土坑 89 基、遺物集中 3 箇所である。集落域は大きく 3 グループに分けられる。

集落 A とした①—2 区・②—2 区、③—2 区・④—1 区は竪穴住居跡と墓跡が切り合っているが、出土土器からみると集落域から墓域へと移行したと考えられる。人形土器 2 例は、①—2 区、②—2 区、③—2 区から出土した。

#### 2. 人形土器について

西一里塚遺跡群から出土した 2 例の人形土器は以下のとおりである。(図 1)

##### (1) No1 例

No1 例は一部欠損している部分もあるが、頭部から底部までの全体像がわかる資料である。頭部は①-2 区の遺構外からの出土、左腕部は②-2 区・SD37 の第 14 層からの出土、胸部～底部までは②-2 区の遺構外からの出土である。頭部と左腕部は発掘調査段階で発見されたものだが、胸部～底部は、本格整理に入り接合作業を進めるなかで同一個体と判明したものである。頭部 1 点、腕部 1 点、胸部～底部 8 点の破片が接合した。出土位置を押さえられたのは左腕部のみであるが、部位により調査区を異にしていることがわかる。

頭頂と底面がわずかに欠損・剥落しているが、現存する高さは 28.2cm を測る。胴部の最大径は欠損しているが 12cm 以上はあると推定できる。頭部は中実である。頭頂部は先述のとおり若干欠損しているが、盛り上がりしており、髪形を表現していると思われる。後頭部をみると大部分は剥落しているが頭頂から粘土紐を貼り付けた痕跡がうかがえる。髪を中央で編んで垂

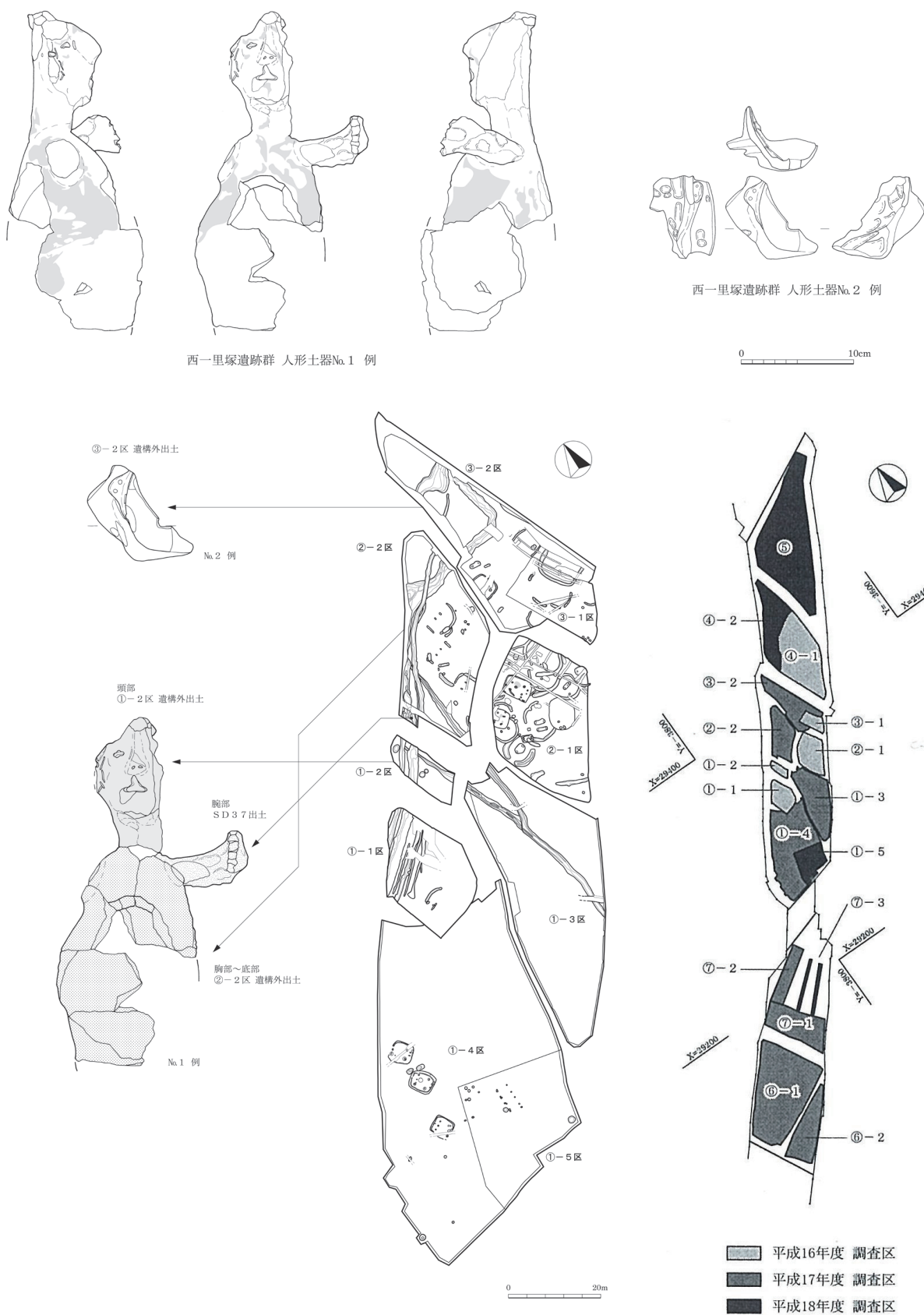


図1 西一里塚遺跡群の人形土器

らした形を示していると考えられる。

顔面は左側が欠損しているため、鼻・口と右目、右耳が残っている。顔面は上向きであり、30度ほどの角度を有する。顎の一部も欠損する。鼻は高く、鼻筋が弓なりに曲がるいわゆる鷲鼻状である。鼻孔は2ヶで約8mmの深さまで穿されている。口は「上」状に刻まれている。口蓋裂を表現したものであろうか。右目は深く彫り込んで形成されている。右耳は中央やや上側に穿孔を施しているが、この小孔より下側は一部欠損している。こうした小孔と沈線で耳を表現していることがわかる。また器面調整はやや粗く、鼻と耳は貼り付けていることがよく観察できる。後頭部は剥落している部分が多いこともあるが、概して粗いつくりである。赤彩の痕跡は右目から鼻の上側、顎・頸部の一部に残されている。頸部では後ろ側にも赤彩が認められている。

左腕部は指頭痕がよく残り、指は先端を欠損しているが5本を表現する。右腕は欠損するが、剥落部分は左腕より下側にあることがわかるため、左右の腕の伸びる方向はやや異なっていた可能性がある。

胸部～底部は欠損部分が多いが、胸部に開口部が認められる。横幅は約4cmをはかるとみられる。縦幅は下側が欠損しているため不明であるが、割れ口の観察から最大でも約1.5～2cm程度ではないかと推測する。

赤彩は胸部から底部に至るまでその痕跡が認められる。おそらく頭部から底部までの全体に赤彩していたと考えられる。胸部～底部の内面はハケメも一部みられるが、指頭痕がよく残っている。製作技法についてみると、胸部から底部までをつくった後に、腕部と頭部を付けたことが理解できる。

なお、この他にも接合はしなかったものの、No1例と同一個体とみられる破片9点が検出されている。所産時期は溝SD37の時期や周辺の遺構の状況などから弥生時代後期と考える。

## (2) No2 例

No2 例は、③-2区のIV層から出土し、頭部の顔面右半部のみが検出されたものである。接合作業を進めるなかで判明した。頭部は中空であり、開口部が後頭部側にある。耳には2ヶの小孔が穿がれている。口も孔で表現している。耳の背後には髪形を表現したとみられる突起が広がっている。わずかに剥落した箇所もあるが顔面は扁平であるのが特徴であり、いれずみ

等はみられない。顔面には酸化鉄の付着が目立つ。内面には指頭痕が明瞭に認められる。なお、接合はしないものの同一個体とみられる破片が他に1点検出されている。小山岳夫氏が指摘するように髻状の頭部や顔面の表現などに土偶形容器の作り方を踏襲しているところがみられることから、No1例よりも古相である可能性も高い。弥生時代中期後半も含めた時期の範囲でとらえた方がよいであろう（小山2012、櫻井2012a）。

## III. 人形土器とは？

### 1. 人面付土器との関係

弥生時代の人体表現にかかわる遺物には、土偶形容器の他、鯨面（有髯）土偶や人面付土器などもある。このうち时期的に西一里塚遺跡群の人形土器と合致するのは人面付土器である。そうしたなか、西一里塚遺跡群での2例をあえて「人形土器」として人面付土器と区別して理解するのか、その理由は以下に述べていきたい。

人面付土器については石川日出志氏や黒沢浩氏、設楽博己氏、前田清彦氏をはじめとする諸氏が論じている（石川1987a・1987b、黒沢1997、設楽1999、前田2009）。

論者により若干の認識の差異はあるものの、人面付土器を人面付土器Aと人面付土器Bの2つに分けて理解することでほぼ論は一致している。

黒沢浩氏の分類によれば、人面付土器Aは「人面に細沈線などの装飾を施して鯨面とおぼしき表現をとり、また顎に相当するラインに髯状の隆帯をつけたりしているもの」であり、人面付土器Bは「人面に装飾的な文様がなく、鼻筋の通った顔だちのもの」である。黒沢氏は人面付土器Aには茨城県・女方遺跡例や長野市・松原遺跡例などをあげ、人面付土器Bとしては群馬県・有馬遺跡例、千葉県・三嶋台遺跡例、神奈川県・上台遺跡例、神奈川県ひる畑遺跡例などをあげている。そして人面付土器Aは中期前半頃から出現し、中期後半頃に消滅するという。

一方の人面付土器Bは中期後半頃に出現し、後期まで続くことを指摘する。西一里塚遺跡群No1例は、人面に装飾的な文様がないことから人面付土器Bに分類されるものと理解できる。

黒沢氏は、人面付土器Bは人面付土器Aとは異なる



図3 人形土器A類

る系譜下にあらわれることを指摘し、前田氏も人面付土器Aと人面付土器Bとは「その成立事情・時期・分布を異にする似て非なるもの」と言及する。黒沢氏は人面付土器Bのうち群馬県・有馬遺跡出土例につ

いては「特異な形態」とであると述べる。本例と同じく腕を有し、より立体的な表現となり、しかも耳や口などを強調した表現である。

私もこの人面付土器Bのうち、腕を有するなどよ



り立体的なものについては、「人面付土器」という語にはそぐわないのではないかと考えるのである。前田氏も人面付土器 A と B は呼称を別にした方がよいとの指摘をする。私も同感であり、近年、有馬遺跡と同じく群馬県・小八木志志貝戸遺跡から出土した事例は、「人形土器」という語で紹介されてきていることも踏まえて、本例も「人形土器」という用語が最もその特性をあらわすのではないかと考えた次第である<sup>1)</sup>。

西一里塚遺跡群から出土したもう一点、No2 例は人面に装飾的な文様はないことは No1 例と一致している。No2 例は頭部の左半部のみの残存であることからその全体像はつかめないが、開口部が後頭部にあることは確認できた。顔面が平坦ではあるが、開口部の位置などは千葉県・三嶋台遺跡例によく似ている。そこでこの No2 例も同じく人形土器として理解できると考える。

## 2. 人形土器の 2 者—A 類と B 類—

ただし、No1 例と No2 例を比べると、No 1 例は「⊥」状に表現するなど「異形」な様相を示すのに対し、No2 例はそのようなつくりではないといえる。三嶋台遺跡例やひる畑遺跡例については橋本裕行氏が「やさしい顔」と述べているがこれは実面的を得た、適確な表現である（橋本 1997）。私はこうした「やさしい顔」をしたものを人形土器 A 類とし、誇張表現を呈する「異形」なものを人形土器 B 類として理解するのが適当であると考えます。

こうした観点から分類した人形土器の事例を次節にとりあげたい。

## IV. 人形土器の事例

### 1. 人形土器 A 類（図 2）

#### ○西一本柳遺跡 No1・No2 例（佐久市）

佐久市岩村田に所在する。本遺跡は十数次にわたる発掘調査が実施されてきているが、第 1 次調査及び第 14 次調査において計 2 点の人形土器が出土している。

本稿では第 1 次調査で出土したものを No1 例、第 14 次調査で出土したものを No2 例として論じていきたい。

No1 例は人面付土器として報告されているが、岩村田高校第 2 グランド建設に伴うものであった。弥

生時代中期後半の竪穴住居跡の埋土中から出土した。

検出されたのは頭部のみであったが、残存長は 12 cm で、首より下の欠損部分は壺胴部へとつづくことが想定される。頭頂に径 3cm の開口部がある。眼はくりぬいて表現される。眼の上には弱い沈線があり、二重まぶたか眉を描いたものと考えられる。鼻は鼻筋が通って高く、鼻孔は表現されていない。口はくりぬかれており、2 つの孔で表現される（註 2）。耳は両側ともに 2 つの孔があげられている。

頭部には 4 本の細い粘土紐をめぐらせている。上端には刻み目を施す。頭頂部に近い 1 本は全周せずの後頭部で途切れている。髪形を表現していると思われる。また左頬から下顎にかけてわずかな赤彩が残存する（林 1994・富沢 2012）。

No2 例は、No1 例の頭頂部に非常によく似たつくりをもつ蓋である。弥生時代中期後半に位置づけられる 25 号住居跡から出土している。3 列の紐帯が 4 分の 3 ほど貼り付けられたもので、内面には幅 5mm の外周に沿った円形の欠損痕がある。これはかえりが欠損していると推測できよう。紐帯がない部分が後ろになるのであろう。

口径は 8.6cm とやや大きいため、No1 例と合わせるものではないが、No1 例のような人形土器には蓋が存在していたことを示す貴重な資料となる（森泉 2010・櫻井 2012）。

#### ○中佐都小学校所蔵資料例（佐久市）

佐久市塚原に所在する中佐都小学校に所蔵・展示されているものであり、近頃、堤 隆氏により報告された新資料である（堤 2012）。注記には「土偶・弥生・石キ・学校」という記載はあるが、出土地についての記載はない。西一里塚遺跡群からは約 500 m の距離であり、同じく中佐都地区の塚原・平塚周辺からの出土であることは間違いないと思われる。本例は顔面のみが残存している。顔面の残存部は高さ 6.5cm、幅 7.7 cm、厚さ 5.2cm をはかる。全体に赤彩されている。眼の孔と口の孔は穿孔されている。鼻孔も 2 箇所を表現しているが、貫通はしていない。壺状の器体に板状の顔面部を接合したものと理解される。弥生時代後期の可能性が高いが、中期後半まで含めた時間幅のなかでとらえた方がよいかもしれない。

#### ○三嶋台遺跡例（千葉県市原市）

市原市郡本 4 丁目に所在する。古代の市原郡家跡

に比定される郡本遺跡の北西に位置する。本遺跡は正式な発掘調査が実施されたことはないが、東京湾を望む台地縁辺に立地する環濠集落跡と推定されている。墓域も伴っていると考えられている。人面付土器として紹介されている本例は昭和初期に耕作中に畑から発見されたものである。畑には貝殻が散布しており、小規模な貝塚の存在が予想される。本例は多量の貝殻とともに発見され、貝層中からは土器片や人骨も出土していたという。貝層の下には住居跡があった模様である。出土土器は中期後半の宮ノ台式期のものであるため、本例も同時期と判断されている（須田 1976・宮本 1999）。壺形土器に顔面と腕が表現されており、全体の高さは 17.9cm、胴幅 11.4cm、重量は 507.3 g をはかる。後頭部に縦 1.7 × 横 1.8cm の開口部がある。

目のまわりを除いた顔面には赤彩が施されている。化粧や入れ墨などの表現とも考えられるという<sup>2)</sup>。顔は上向きである。頭部には開口部を囲むように貼り付けた鰐状突起があり、髪形もしくはかぶりものをあらわしているのかもしれない。胸部には 3 本の曲線が描かれている。衣服やネックレスを表現したものと考えられそうである。腕部では右腕のみが残存している。右腕は先端が欠損しており、指の表現などは不明である。左腕は欠損するが、剥落箇所をみると右腕よりも上方にあることがわかり、腕の位置が左右で異なることが予想される。これは西一里塚遺跡群 No1 例にもみられるものである。胴部上半には赤彩が施されている（写真は市原市教育委員会の掲載許可済）。

#### ○上台遺跡例（神奈川県横浜市）

横浜市鶴見区上末吉町に所在する。標高約 40 m をはかる丘陵の西縁近くの平坦面に立地する。人面土器として報告された本例は、畑を深耕中に採集されたものである。現地表下 130cm のところに長径 110cm、短径 80cm の楕円形ピットが認められ、そこから本例が出土したという。またこのピットの内部からは木炭が部分的に検出されたということである。また周囲には炉跡と考えられる遺構も発見されているといい、集落跡が広がっていたようである。

本例は、頸部の一部が欠損しているのみであり、ほぼ完形品といえる。器高 33cm、口径 10cm、胴部最大径 18.5cm をはかる。壺形土器の頸部から上部に人面部がつけられている。口辺部には羽状縄文が配される。また施文帯の中央には斜縄文のある小円盤が貼付

され、その下部には人面部を除いて綾絡文を施している。眉毛、耳、鼻は貼り付けられ、眼、口は篋状工具であけられている。耳は左右ともに 0.2cm の孔が 3 箇所穿たれている。

頸部には、口辺と同じく斜縄文のある小円盤を巡らし、その上下にそれぞれ綾絡文が施されている。胴部にも羽状縄文帯が一条みられ、これも綾絡文で画されている。

器表面には赤彩が施されている。本例は弥生時代後期に比定される（坂詰・関 1962）。

#### ○ひる畑遺跡例（神奈川県横須賀市）

横須賀市小矢部町に所在する。かつて本遺跡の一部が削平された際に、弥生時代中期後半の宮ノ台式土器の破片とともに採集されたものである。

人面土器として紹介された本例は、顔面を中心とする頸部以上の破片であり、頸部の約 3 分の 2 と後頭部の大半は欠損している。残存部における高さは 13.1cm、幅 10.5cm をはかる。

顔面はほぼ円形に面取りされ、頭部との境は鈍い稜をなす。目は篋状工具で直線的に描かれ、眉、鼻、耳は粘土を貼付けて形成される。鼻は長さ 2.7cm、幅 1.7 cm、高さ 0.8cm で、鼻孔は 2 個の刺突で表現される。耳は右側のみが残存し、中央に径 4mm の孔がある。口は篋状工具であらわしている。顎はやや垂れ下がった状態で突き出している。頸部は径約 8cm と推定され、残存部の形状から壺形の胴に続く可能性があるという。また加熱による器面の損傷がみられることから、二次的な被熱を受けたことが指摘されている（神沢 1967）。

本遺跡は標高約 40 m の小台地上に立地する。竪穴住居跡の存在が知られており、そのなかには焼失住居跡もあるようである。神沢氏は住居内に置かれていたと推測している。

器面は全面に赤彩が施される。

#### ○有東遺跡例（静岡県静岡市）

静岡市豊田・富士見台に所在する。弥生時代を中心とした大規模な遺跡であり、発掘調査は幾次にも及んでいる。平成 2・3 年に行われた第 8 次調査において人面付土器として報告される本例が出土している。弥生時代中期中頃から末までの遺物が多く出土する河川からみつかった。河川の底近くからの発見である。残存するのは頭部のうち、左耳、左眼の下部、鼻、右面

の半分、口、顎であり、右眼、右耳と上部は欠損している。眼は切れ長に窪めており、貫通はしていない。鼻は粘土を貼り付け、両脇から押さえて筋の通った形に仕上げ、鼻の孔は2ヶ穿つ。耳にも貫通する孔を開けている。口の下には横方向に粘土を貼り付けて顎を表現している。「全体的に端正で穏やかな顔立ち」をしていると報告者は述べ、ひる畑遺跡例との類似を指摘する（伊藤 1993）。

なお、平野進一氏の論考においてはもう1例がとりあげられており、これも人形土器A類に分類できるとみられるが、今回は参考文献にあたっていないため図示はしていない（平野 2001）。

## 2. 人形土器B類（図3・4）

### ○有馬遺跡例

有馬遺跡は渋川市に所在し、弥生時代中期後半から古墳時代初頭まで継続した拠点集落である。報告書では人物形土器という名称である（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990）。有馬遺跡例は、高さ36.5cm、最大幅14.0cmをはかる。特徴的なのは下唇が突き出した口であり、開口部も兼ねている。こうした口の他にも耳や鼻が誇張された表現といってよいだろう。弥生時代後期には周溝墓群による墓域と居住域がみられるが、出土したのは、14号周溝墓の主体部とみられる礫床墓401から南に約1mの地点からであり、うつぶせの状態で見出されたという。周辺の遺構の時期から弥生時代後期に位置づけられている。

### ○有馬条里遺跡例

群馬県渋川市八木原に所在する。有馬遺跡は本遺跡南側に隣接する台地上に立地する。古墳時代の水田跡と畠跡に加え、弥生時代から平安時代の集落跡・礫床木棺墓などの墓跡等がみついている。人面付土器と報告されたものは、遺構外出土であり、鼻と鼻孔のみが残存する（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989）。鼻は誇張表現され、赤彩が施されている。また諸田康成・水田稔両氏によれば同じく遺構外から出土した匙形土器と報告された破片も右腕とみている（諸田・水田 2008）。これは全面にヘラミガキが施されている。

### ○小八木志志貝戸遺跡例

小八木志志貝戸遺跡は、高崎市に所在し、弥生時代後期から古墳時代前期に続く遺跡である。人面付土器として報告されているが、復元高27.5cm、胴部中

央部で17.5cmをはかる（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999）。こちらも口が開口部となっており、「豚鼻」のようなユニークな鼻や大きく広がる耳が特徴的である。本例は1区とされた調査区の濠（KS1-07号遺構）及び東側の土器集中地域（土器捨て場）から出土している。接合関係からすると土器集中地域中のものが破片となって濠中の下層に落ち込んだものと報告者はみている。この1区は弥生時代後期中葉には土器棺墓20数基が密集する墓域であり、その後は土器捨て場となっていたようである。本例も弥生時代後期の所産とみてよいだろう。

### ○川端遺跡例

群馬県吾妻郡中之条村伊勢町に所在する。昭和62年度・平成3～5年度に発掘調査が実施され、弥生時代から平安時代の遺跡であることが判明した。弥生時代では住居跡の他、甕棺墓や溝跡が見出されている。報告書は未刊であるが、人形土器はすべて破片資料ではあるが中之条町歴史民俗資料館には人物形土器として11点が展示されている。そのうちの7点については平野進一氏により図化・報告されている（平野 2001）。ここでは平野氏の報告に基づいて紹介する<sup>3)</sup>。

No1例は頭部破片であり、弥生時代後期後半の155号住居跡及び4号トレンチから出土した。頭部を欠いた顔面から頸部にかけての部分である。赤彩された扁平な顔面は残存高8cm、残存幅9.5cmをはかる。棒状工具により刺突された円形の眼と二つの鼻孔、上半が欠損した左右の耳下部に小孔が表現される。体部は中空で容器形態になると思われる。

No2例も頭部破片であり、弥生時代後期中葉の108号住居跡から出土した。赤彩され、断面が扁平状を呈する。残存高5cm、残存幅7.5cmをはかる。肩の部分が盛り上がり、左右の眼と鼻孔が棒状工具で刺突される。鼻下には上唇とみられる弧状の切り込みがあり、特異な表情をみせる。内部は中空である。

No3例も頭部破片であり、弥生時代後期後半の204号住居跡から出土した。顔面は右側のみが残り、赤彩される。眉の部分が高く盛り上がるのが特徴といえる。鼻は剥落し、右眼と半円状の口の一部分が残存する。顔面の残存高8cm、残存幅6.5cmをはかる。

No4例も頭部破片であり、包含層からの出土である。赤彩された目尻から頬にかけての左顔面の破片である。左眼、口のくりぬき部分がわずかに残る。顔面



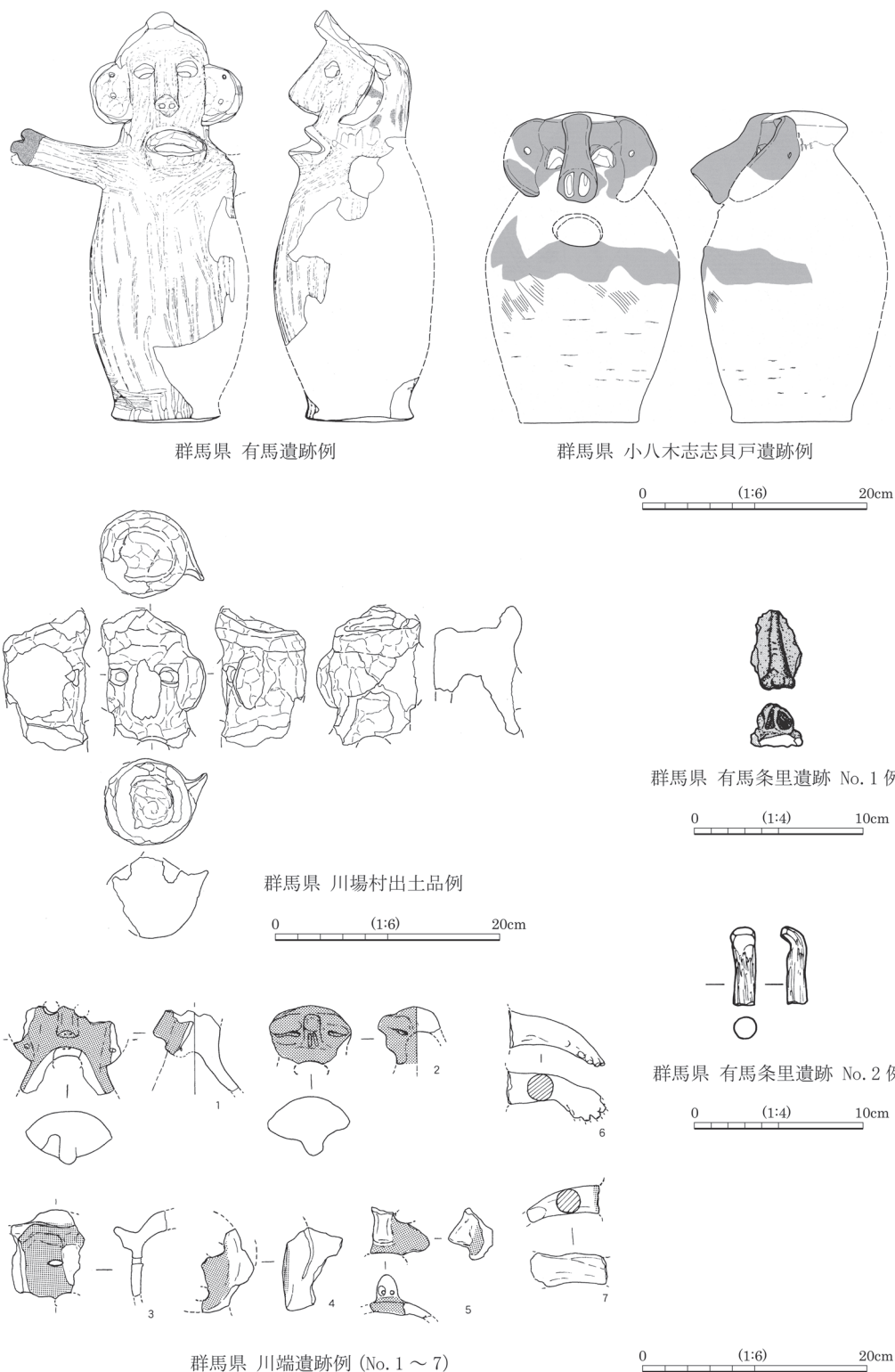


図3 人形土器B類(1)

の残存高 8cmである。

No5 例は左顔面破片であり、遺構外出土である。鼻以外が赤彩される。高い鼻に刺突された鼻孔、左の眼頭、口唇上部が残る。顔面の残存高 4cm、残存幅 5

cmをはかる。

NO6 例は左腕破片であり、弥生時代後期の 5 号土坑から出土した。体部から剥落した長さ 9.5cmの左腕で、指先端部分が欠損しているが 5 本の指が表現さ



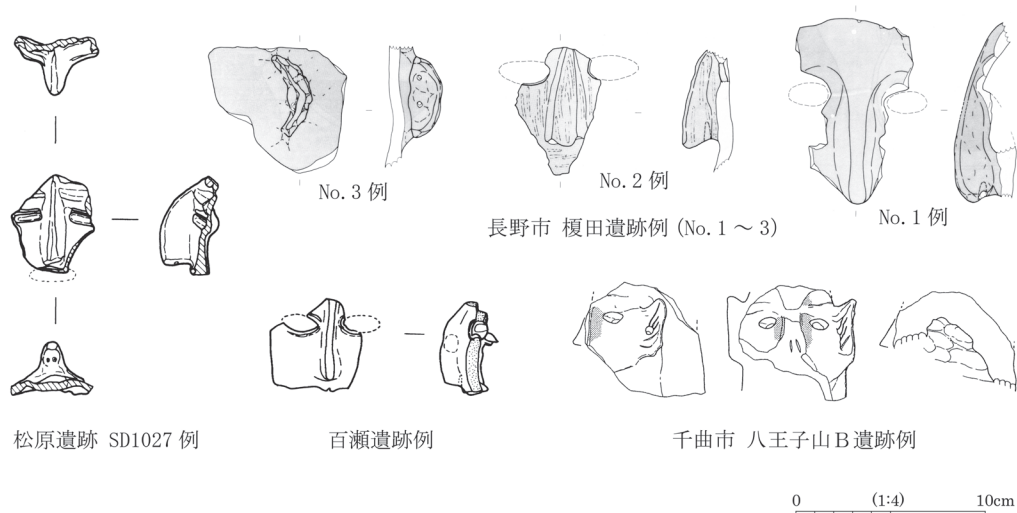


図4 人形土器B類(2)

れる。

No7 例は右腕破片であり、弥生時代後期中葉の164号住居跡から出土した。体部から剥落した長さ6.5cmの右腕で、指の部分を欠損する。腕の付け根部分に赤彩がある。

#### ○川湯村出土例

群馬県利根郡川湯村で昭和29年に採集され、個人蔵資料として保管されてきたものである。その後所在が不明であったが、諸田康成氏と水田稔氏により所有者が判明し、資料報告されることとなった(諸田・水田2008)。

本例は川湯村生品字宮山から出土した。川湯村の南西部の薄根川左岸の段丘上に立地する。畑耕作中に採集されたが、出土状況は「敷きならべた石の上からも下からも、ゾクゾクと土器の破片が出てくる。(中略)なおこの後、この附近から、土偶の首が一個出土している。」と記されている。当時は縄文時代後期の土偶とみられていたようだが、これが本例の発見となる。縄文時代と弥生時代の遺構・遺物が複合していることは確定的であると諸田氏と水田氏は考えている。

報告では人物形土器とする本例は、頭部の上唇より上位部のみが残存する。頭頂部の突起の右端部が欠損し、右耳と鼻は接合部から剥離する形で欠損する。残存高12.4cm、左耳を含む残存幅は9.1cmをはかる。鼻のあたりまでは中空に作られ、鼻の上部あるいは眼の下あたりからは粘土塊となり、接合部を示すとみられるヒビが認められる。ヒビの入り方から、まず顔面部を主に中空をなす粘土成形がなされた後、後頭部側を

主に粘土塊を積むように接合して頭部本体を成形したとみられる。頭頂部の突起は粘土貼り付けによるもので、頂部の縁に粘土紐を積み、前頭部に突起を形作る粘土を貼っている。時期は弥生時代後期から末期と考えられている。眼は粘土塊の部分にあたるため貫通していないが、棒状もしくは指頭で表現されている。鼻は、接合面から剥離した形で欠損する。口は、上唇の一部を除いて欠損する。耳は、右側は欠損するが、この剥離面に植物質の痕跡が認められるという。残存する左側は頬部を肥厚した後に耳の本体を貼付した痕跡が認められる。赤彩はみられない。

#### ○榎田遺跡例

長野市若穂綿内に所在する。弥生時代から中世にいたる複合遺跡であり、平成元～4年にかけて行われた発掘調査により検出された竪穴住居跡は1000軒を超える。時期がわかるものでは弥生時代中期後半44軒、後期から古墳前期約130軒、古墳時代中期から後期約520軒などとなっている。弥生時代後期の墓域にあたる場所から遺構外出土であるが顔面破片3点がみつかった(長野県埋蔵文化財センター1999)。周辺には円形周溝墓の周溝部と想定される溝跡が分布し、集団墓地帯で行われた葬送儀礼行為に伴ったと考えられる(賛田2000)。ⅢP2グリッド出土例は、鼻と眼の一部のみの残存であり、残高約6cmをはかる。ⅢP6グリッド出土例も同じく鼻と眼の一部のみの残存であり、残高約9.5cmをはかる。ⅢP7グリッド出土例は耳が残存するのみであり、残高約7cmである。3例とも鼻や耳を強調した表現であり、赤彩が施され

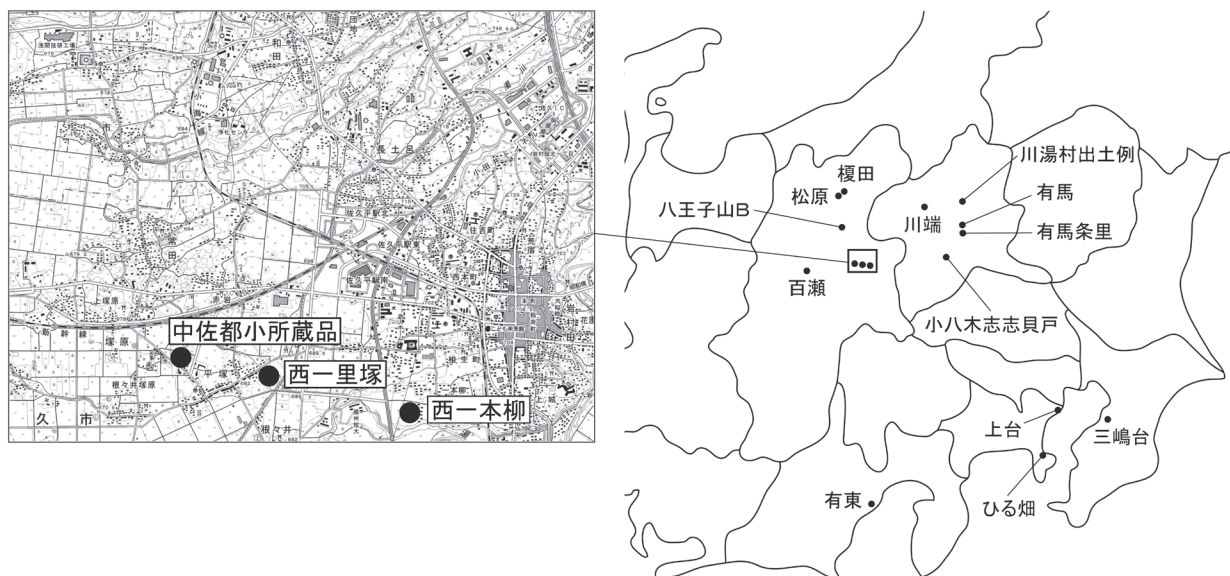


図5 人形土器の出土遺跡

ている。

#### ○松原遺跡例

長野市松代東寺尾に所在する。平成2～4年にかけて行われた発掘調査により、弥生時代中期後半では住居跡約300軒、平地式住居跡約100軒もの遺構が発見され巨大集落跡であることが判明した遺跡である。ここから弥生時代中期後半の住居跡や溝跡から人面付土器5点が出土している（長野県埋蔵文化財センター2000）。完形のSB1178出土例が著名であるが、人形土器B類としてとして取り上げたいのはSD1027出土例である。SD1027出土例は顔面の眼と鼻部分のみが残存する。残高は約5cmであり赤彩されている。鼻が大きく誇張表現していることから人形土器B類とする。なお頭部のみが残存するSB1108出土例についてもその可能性はあるものの、ここでは判断は保留し参考資料としておきたい。

#### ○八王子山B遺跡例

長野県千曲市（旧戸倉町）若宮に所在する。千曲川左岸の佐良志奈神社の南側に遺跡はある。人面付土製品と報告される本例は、八王子山の北山腹のテラス状平地を駐車場造成した際に発見されたものである（戸倉町誌編纂委員会1999）。頭部破片と底部破片のみで、胎土から同一個体とみられるという。中空のつくりで、眼はともに楕円形の貫通孔で表現される。鼻はほとんど欠損するが、鼻孔があったことは2つの孔の痕跡によりわかる。左耳はややつり上がり状につけ

られているが貫通された穿孔がみられる。頭頂は欠損しているが、丸みを表現しているようである。顔面の下半は左側だけが残存するが、顔・頸部も表現される。鼻のまわりの両側に赤彩が残されている（戸倉町誌編纂委員会1999）。底部があることから人形土器であることがわかり、鼻や耳に誇張表現があることからB類に分類したい。

#### ○百瀬遺跡例

長野県松本市寿地区に所在する。弥生時代～平安時代の遺跡であるが、平成11年に行われた第4次調査において遺構外出土であるが、人面付土器として報告された本例が発見された。顔面の一部が残存するのみであるが、両眼、鼻、上唇が認められる。眼は周囲に沈線の縁取りを行い、鼻孔は1穴のみである。両眼の孔は外側からあけられている（松本市教委2001）。

頭部が中空であることも異なる。後述する有馬遺跡例や同じく群馬県の小八木志志貝戸遺跡例は耳や顔、鼻を強調してやはり「異形」である。したがって、No2例や三嶋台遺跡例を人形土器A類、No1例のような「異形」なものを人形土器B類として細分してとらえるべきではないかと考える。

なお、現在整理中の佐久市の西近津遺跡群や大豆田などでも破片ではあるが人形土器B類の出土をみている。また中野市七瀬遺跡から出土した「人面土製品」や群馬県日高遺跡から出土した「土製人形」については、人形土器に分類してよいか形態的にも時期的にも

迷うところもあるため、その可能性は残しつつも今回はとりあげないことにしたい。

## V. 出土状況からみる人形土器の性格

### 1. 西一里塚遺跡群例の出土状況（図1）

西一里塚遺跡群 No1 例の出土状況において注目されるのは、離れた地点から出土した部位が接合したごとと、墓域からの出土であることである。

ア. 離れた地点から出土した部位が接合したこと

No1 例の出土状況をみてみると、頭部は①-2 区、左腕部は②-2 区の溝跡 SD37、胸部から底部は②-2 区からと、その部位により出土地点を異にする。このことは、以下の 2 通りの解釈ができる。

①この人形土器が廃棄された後に、後世の攪乱などにより各部位が分かれてしまった。

②人形土器を意図的に破砕する行為があった。

この 2 つの解釈はあくまで推測の域を脱しないが、2 つの可能性のあることを指摘することができよう。

イ. 墓域からの出土であること。

②-2 区、③-2 区からは円形周溝墓、方形周溝墓が 18 基以上、木棺墓 2 基が検出され、①-2 区では①-3 区へ続く SD15 上面に土器棺墓 5 基が認められている。No1 例が墓域から出土していることが理解できよう。

また No2 例についても、③-2 区から出土しているため、こちらも墓域からの検出であることがわかる。

### 2. 他遺跡例での出土状況（図6）

ここで前節にみた事例についてもその出土状況をみてみよう。まず出土場所であるが以下のように分類できる。

#### ① 竪穴住居跡からの出土

西一本柳遺跡例、川端遺跡例、松原遺跡例が竪穴住居跡からの出土である。いずれも覆土中からの検出である。

#### ② 墓域からの出土

墓そのものから出土した事例はないが、有馬遺跡例、小八木志志貝戸遺跡例、榎田遺跡例は円形周溝墓や方形周溝墓、土器棺墓のみられる墓域からの出土と理解してよいだろう。

#### ③ その他・出土地不明

有東遺跡例は河川からの出土、有馬条里遺跡例は遺

構外出土である。中佐都小学校所蔵例、川湯村出土例、三嶋台遺跡例、上台遺跡例、ひる畑遺跡例は採集品であるため出土状況ははっきりしない。ただし、三嶋台遺跡例と上台遺跡例は採集された際の所見からみると竪穴住居跡からの出土である可能性がある。

#### ④ 出土状況からみえてくるもの

このように墓域から出土するものと竪穴住居跡から出土するものに大きく分けることができる。このことは A 類、B 類ともに共通する。

ところで竪穴住居跡から出土する 3 遺跡例をみるといずれも覆土中から発見されており、竪穴住居が機能していた段階に伴う可能性は低いと考えられる。あえて竪穴住居跡との関連性を強調しなくてもよいのではなかろうか。廃棄された場所が竪穴住居跡であったととらえるべきと考える。川端遺跡でみると、遺跡内から土器棺墓も検出されているがこれは、墓域で使用された人形土器が竪穴住居跡に廃棄されたと考えるのが自然ではなかろうか。

西一里塚遺跡群例での出土状況では、離れた地点から出土した部位が接合したことを先に指摘した。このことから私は、この人形土器が廃棄された後に、後世の攪乱などにより各部位が分かれてしまったか、あるいは人形土器を意図的に破砕する行為があったことを示すものではないかと推測したが、いずれにせよ人形土器はその役割を終えた後には、墓域のみならず竪穴住居跡や溝跡などに廃棄されたと考えるものである。したがって竪穴住居跡からの出土を人形土器の機能と関連づける必要はないと理解する。

私は墓域から出土することを重視し、人形土器が墓と深い関連性をもつものと考えたい。

## VI. 人形土器の機能・性格

それでは人形土器の機能・役割は何であろうか。墓と深い関連性を有するとはいっても人形土器が墓そのものから出土する事例はない。したがって副葬品であったり、土偶形容器のように骨壺であったとは考えがたい。ここで注目したいのは有馬遺跡例である。本例は周溝墓の主体部とみられる礫床墓から南に約 1 m の地点からであり、うつぶせの状態で検出されたという。この出土状況からみれば墓域の一角に置かれていたことが想定できないだろうか。そしてそのまま放置されたのであろう。竪穴住居跡や溝跡から部位が分か



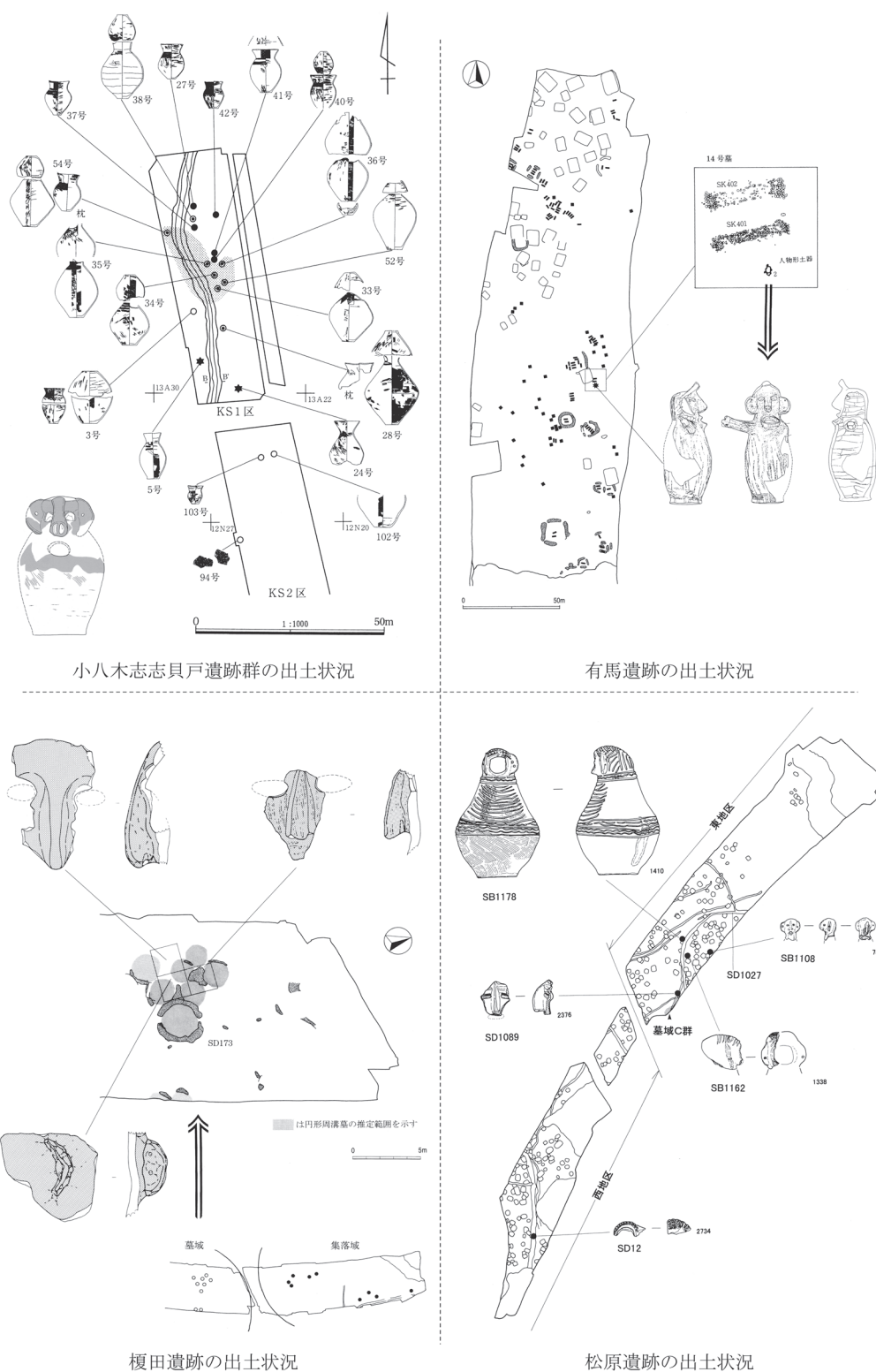


図6 人形土器の出土状況

れて出土する事例も少なくないが、人形土器はその役目が終わった後は放置・廃棄されるものであったのであろう。

では何のために墓域に置かれたのであろうか。こ

こで手がかりになるのが人形土器B類の顔の表現である。先述したように人形土器B類の特徴は口や耳、鼻などの誇張表現である。西一里塚遺跡群 No1 例は口を「⊥」状に表現する。有馬遺跡は口と耳を誇張、



小八木志志貝戸遺跡例では「豚鼻」のようなユニークな鼻や大きく広がる耳が特徴的である。

こうした誇張表現が人形土器 B 類の特徴であるわけなのだが、その目的はといえば、私は墓もしくは墓域における魔除け的な役割を果たしたものであると考える。こうした人形土器 B 類の誇張表現について設楽博巳氏は「辟邪」という視点から論じている（設楽 2012）。設楽氏は、西一里塚遺跡群 No1 例と有馬遺跡例をとりあげて、この 2 例は顔面の表現が誇張されていることを指摘する。そして再葬墓から出土する顔壺や土偶形容器と大きく相違したものであり、盾持人埴輪との性格の共通性を指摘する。設楽氏は有馬遺跡例が顔の誇張表現に加え、墓の主体部からやや離れた場所から出土していることから、外敵から墓を守っていたと考えている。そして、盾持人埴輪が古代中国の方相氏と関連するのではないかとする塩谷修氏の説を踏まえ、北九州市城野遺跡の 3 世紀の石棺墓の壁に描かれている人物も盾と戈を持っていることから、このころにはすでに方相氏の習俗が取り入れられた可能性を論ずる。

この方相氏は、墓に入って戈を振り悪霊を退散させる役割を演じるものである。中国哲学者の加地伸行氏によると、「方相は、喪（葬）儀のとき、先に墓壙（墓穴）に入り、穴の隅を戈で撃って魍魎（もののけ）どもを追いはらう役目を行う。追いはらうわけとして、魍魎は死者の肝を好んで食うからであるという解釈も生まれる。」（加地 1991）ものであり、また方相の他にも同様な役割を果たすものに蒙倂もあり、ともに武事を表し、喪（葬）礼にも関わりが深いと述べている。

設楽氏は、北部九州に紀元前 1 世紀以来、中国の文物が流入していたが、その過程のなかでとりいれられた方相氏の習俗が長野県や群馬県にも及んで、作られたのが人形土器ではないかと推測する。これはきわめて重要な指摘であると私は考える。出土状況からみても、人形土器は墓域における「辟邪」がその最大の機能であったものであったことは無理なく理解できる。異形な様相は「辟邪」に必要不可欠なものであったといえよう。

私も設楽氏の論に賛意を示したい。人形土器が墓域から出土すること、しかも墓の中におさめられたものではないことは、蔵骨器ではなく、設楽氏のように外敵（悪霊）から墓もしくは墓域を守ることがその役

割であったことを物語るのであろう。顔の誇張表現も悪霊を妨げるためには重要な要素として欠かせないものであったと理解できる。

## VII. 人面付土器から人形土器へ

土偶形容器は再葬のための蔵骨器である。この蔵骨器としての機能は、人面付土器 A までで続くと私はみている。

この機能が変わるのが、人面付土器 B、そして人形土器である。開口部の小ささはもはや蔵骨器としての役目を果たしてはいない。また造形もより立体的になる。

ここに至り機能は大きく変わると私は考える。墓及び墓域における辟邪の役割へとその性格は変換してくるのである。

その性格は人形土器 B 類になり、より顕著となる。口や耳、鼻などの顔が誇張表現され、「異形」な様相を呈するようになる。盾持人埴輪に通じるような辟邪の性格がより強調されてくるわけである。

## VIII. 人形土器の系譜

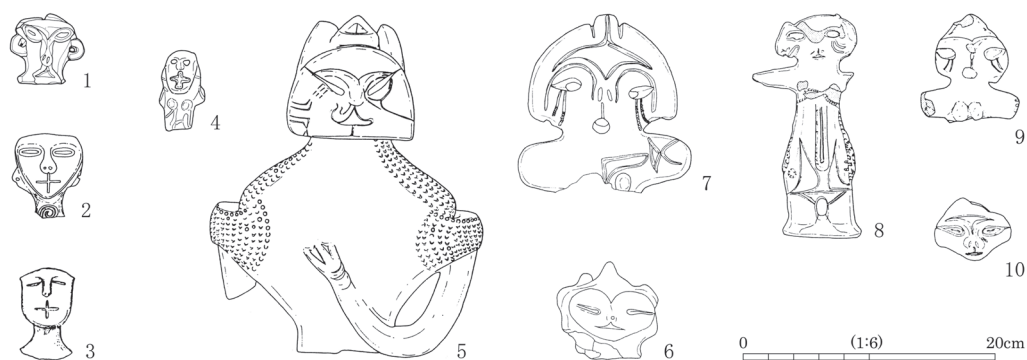
### 1. 縄文土偶からの系譜

さてここで人形土器の系譜をたどってみたい。

西一里塚遺跡群 No1 例・No2 例の 2 点の人形土器は、胸部および後頭部に開口部がみられるが、これは土偶形容器の系譜を引くことを物語っている。土偶形容器は頭部が貫通し、開口部となっているが、蔵骨器としての機能を果たすためのものである。そして、土偶形容器は、縄文時代の黥面土偶の系譜の上にあり、それが消滅する弥生時代前期末から中期前半に集中してつくられたものである。私は、人面付土器や人形土器はもはや蔵骨器としての機能は形骸化し失っていると考えているが、開口部の存在は、土偶形容器とのつながりを示す第 1 の特徴である。

もうひとつ、私が注目したいのは、西一里塚遺跡群 No1 例の口における「⊥」状の表現である。これは口蓋裂をあらわすと私は考える。設楽博巳氏もこれを口蓋裂とみている（設楽 2012）。

縄文土偶のなかにも「⊥」状ではないが、同様な口蓋裂の表現が認められる（図 7）。佐久地方の出土土偶でみると、佐久市岸野の中村遺跡例、佐久市望月地区の堀端遺跡例のように「+」状の口表現をもつ土偶



1. 小諸市 郷土遺跡 2. 佐久市 平石遺跡 3. 佐久市 堀端遺跡 4. 佐久市 中村遺跡  
5. 山梨県 中丸遺跡 6. 山梨県 宮之上遺跡 7. 山梨県 一の沢西遺跡  
8～10. 山梨県 釈迦堂遺跡群

図7 縄文時代の土偶

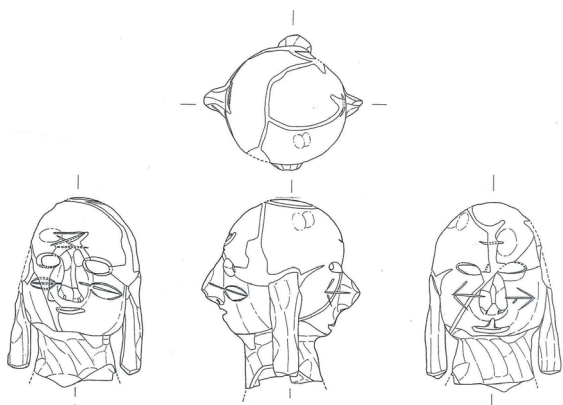


図8 大日山 35 号墳 両面人物埴輪 (縮尺不同)

がみられる。また小諸市郷土遺跡例は「△」状であるが、これも同様な表現ではないかと考える。小林康男氏も平石遺跡例や堀端遺跡例について口蓋裂の表現とみる (小林 1996)。

## 2. 埴輪へつながる系譜

この口の「L」状表現は、埴輪にも事例がある。菅見では、埼玉県長瀬総合博物館所蔵の群馬県出土といわれる「踊る男埴輪」、埼玉県東松山市おくま山古墳出土の「盾をもつ男埴輪」、和歌山県大日山 35 号古墳の「両面人物埴輪」(図 8) 等が「L」状の口の表現をしている。

また岩松保氏は京都府温江遺跡出土の人面付土器を考察するなかで、耳に空けられたピアス状の小孔などの表現上の共通点があることから縄文時代の土偶の系譜を引いていることを指摘する (岩松 2011a・b)。そして古墳時代の埴輪においても、京都市黄金塚 2 号墳から出土した盾形埴輪に描かれた人物線刻画にみ

る頭頂部の突起物や耳飾りの表現が鶏冠状突起や耳介の穿孔に通じること、亀岡市時塚 1 号墳から出土した盾持ち人物埴輪も目・鼻・口の表現の共通性、耳介の孔と考えるスカシ状の表現、頭頂部の突起と頭部の形状の奇抜さから共通性をみて、弥生時代の人面付土器の系譜を引くものと考えている。これは重要な指摘である。このように岩松氏は縄文・弥生・古墳時代の造形物が同一の系譜にあることを指摘する。

私は、人形土器はそれぞれ重なる時期もあるが、縄文土偶→土偶形容器→人面付土器→人形土器 (A 類→B 類) →埴輪という流れのなかに位置づけられるのではないかと考えている。もちろん、人形土器と埴輪の間には時間の間隙があり、また時代が変遷するなかで、その機能・性格も変わっていったことはいうまでもないが、そのなかには縄文土偶にたどれる系譜と埴輪につながる要素が内包していることは指摘できるのではなかろうか。

## IX. おわりに

人形土器は、蔵骨器である土偶形容器の流れを引く造形であるが、その機能・性格は大きく異なったものになっていた。蔵骨器ではなく、墓・墓域において辟邪の役割を果たすためのものであった。なかでも顔の誇張表現が特徴的な人形土器 B 類に至り、その性格はより顕著となる。

人形土器は葬送儀礼の際に用いられたものと私は考える。有馬遺跡例のように墓域に置き去りにされたような状態で出土する事例があり、墓域に配置するためのものであったことが理解できる。一方、竪穴住居跡

などから破片の状態で出土する事例が少なくない。西一里塚遺跡群 No1 例も、離れた場所からの出土破片が接合できた。このように破片状態にして廃棄したと考えられるケースもみられる。葬送儀礼の後に、意図的に破碎し、バラバラにした状態で廃棄する行為が行われた場合も少なくないことが指摘できよう。つまり長期間にわたり、墓域に置かれたものではないことがうかがえるのではなかろうか。

また、墓域における辟邪については、墓域を外から進入してくる外敵（悪霊など）から守ることが人形土器、とりわけ B 類の第一義的な役割であったろうが、もう一方では、死者の霊を墓及び墓域に封じ込めるといことも重要な役割であったのではなかろうか<sup>4)</sup>。

出土地については、今回集成したところでは、西一里塚遺跡群例以外にも、人形土器 A 類が 6 遺跡、人形土器 B 類は 9 遺跡を数える。人形土器 A 類は長野県、千葉県、神奈川県、静岡県に事例があり、人形土器 B 類は長野県と群馬県にみられる。また長野県内では千曲川流域に多く認められることが指摘できる。群馬県でも高崎市周辺から吾妻郡、利根郡に分布はある。長野県千曲川流域と近接する地域だけにその関連性が注目できよう。

土偶形容器に系譜が求められる人形土器（それも B 類により顕著であるが）は埴輪へとつながる要素も内包している。人形土器と埴輪の間には時間差はあるものの、いわば「埴輪プロトタイプ」とも言えるありかたをしているのが人形土器ではないかと考えるものである。そして、こうした弥生時代中期後半から後期にみられる顔面造形の一類型を「人形土器」という範疇で他の人面付土器と区別して理解することにより、弥生時代から古墳時代における死生観や葬送観の解明やその変遷をたどる重要な資料として位置づけられるのである。特に弥生時代後期における人形土器 B 類の出現は大きな画期と考える。今後もさらなる調査・研究を行っていききたい。

## 註

- 1) 前田氏は人面付土器 A を「黥面付土器」と「顔壺」、人面付土器 B を「仮称 非鯨面人形容器」と呼び分けることを提唱する。有馬遺跡の報告書では人物形土器、小八木志志貝戸遺跡の報告書では人面付土器という名称となっているが、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団刊行

の『群馬の遺跡 3 弥生時代』および事業団のホームページでは「人形土器」の名称で紹介されている（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004）。

また群馬県・中之条町の川端遺跡でも人物形土器という名称で「人形土器」の出土をみる。なお、私は人形土器を「ひとがたどき」と呼称する。

- 2) 本例は頭頂に開口部をもち、端正なつくりでやさしい表情をしていることから人形土器 A 類に分類するが、口が二つの孔で作られている点を誇張表現とみるならば、西一里塚遺跡群 No1 例と通じるところもみられる。高い鼻筋の表現なども西一里塚遺跡群 No1 例とよく似ている。
- 3) 平野氏の論考の他には、中之条町教育委員会・中之条町歴史民俗資料館刊行の『中之条町歴史民俗資料館館報第 14 号』1994、特別展解説パンフレット『出土品にみる古代の文化 伊勢町地区遺跡群埋蔵文化財展』1994、『中之条町歴史民俗資料館常設展示図録』2003 を参考とした。
- 4) 私は埴輪についても、死者の霊を古墳に封じ込めるためのものである側面があると考えている。この点において、人形土器と埴輪との大きな関連性がみてとれる。これは墓・古墳の機能、さらには葬送儀礼の根源にもかかわる重要な問題を内包するものであり、稿を改めて論じたいと考えている。

## 引用参考文献

- 石川日出志 1987a 「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究 第 8 巻』雄山閣。
- 石川日出志 1987b 「人面付土器」『季刊考古学 19 号』雄山閣。
- 伊藤寿夫 1993 「有東遺跡（第 8 次調査）出土の人面付土器と鹿絵線刻土器」『ふちゅーる No1 平成 3 年度静岡市文化財年報』静岡市教育委員会。
- 岩松保 2011a 「人面付き土器の系譜（上）」『京都府埋蔵文化財情報第 115 号』京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 岩松保 2011b 「人面付き土器の系譜（下）」『京都府埋蔵文化財情報第 116 号』京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 加地伸行 1991 『孔子 時を越えて新しく』集英社文庫。
- 神沢勇一 1967 「神奈川県・ひる畑遺跡出土の人面土器」『考古学集刊第 3 巻第 3 号』東京考古学会。
- 黒沢 浩 1997 「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル No416』。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 『日高遺跡』。



- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989『有馬条里遺跡Ⅰ』.  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『有馬遺跡Ⅱ』.  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『新保田中村前遺跡Ⅳ』.  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ』.  
小林康男 1996「長野県の中期土偶」八重樫純樹他 1996『中部高地をとりまく中期の土偶』「土偶とその情報」研究会.  
小山岳夫 2012「館遺跡発見の土偶形容器」『佐久考古通信 No110』佐久考古学会.  
坂詰秀一・関俊彦 1962「弥生後期の人面土器について」『考古学雑誌 第48巻第1号』.  
佐久考古学会 2007『佐久の遺跡』佐久考古通信 No99・100 記念号.  
佐久考古学会 1990『赤い土器を追う』.  
佐久市教育委員会 1973『岩村田餅田遺跡-佐久市岩村田餅田遺跡緊急発掘調査概報』.  
佐久市教育委員会 2009a『森平遺跡 北近津遺跡Ⅱ 西一里塚遺跡Ⅲ 大豆田遺跡Ⅲ』.  
佐久市教育委員会 2010『西一里塚遺跡Ⅳ』.  
櫻井秀雄 2012a「西一里塚遺跡群出土の人形土器」『佐久考古通信 No110』佐久考古学会.  
櫻井秀雄 2012b「土偶にたどれる系譜、埴輪につながる要素」『佐久考古通信 No110』佐久考古学会.  
櫻井秀雄 2012c「コラム2 人面付土器の蓋」『佐久考古通信 No110』佐久考古学会.  
櫻井秀雄 2013「弥生時代の人形土器」『金大考古 73号』金沢大学考古学研究室.  
設楽博己 1999「土偶形容器と黥面付土器の製作技術に関する覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告第77集』.  
設楽博己 2011「第3章 男と女の弥生時代」『列島の考古学 弥生時代』河出書房新社.  
設楽博己 2012「辟邪の造形」『佐久考古通信 No110』佐久考古学会.  
須田勉 1976「口絵 人面土器解説」『古代 59・60 合併号』早稲田大学考古学会.  
堤 隆・藤森英二・小山岳夫・富沢一明・櫻井秀雄・森泉かよ子 2008『考古学が語る 佐久の古代史』ほおずき書籍.  
堤 隆 2012「赤彩された弥生顔面—佐久市中佐都小学校所蔵資料—」『佐久考古通信 No110』佐久考古学会.  
戸倉町誌編纂委員会 1999『戸倉町誌第二巻歴史編上』.  
富沢一明 2012「西一本柳遺跡出土の人面付土器」『佐久考古通信 No110』.  
長野県埋蔵文化財センター 1994『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡 七瀬遺跡』.  
長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 12 榎田遺跡』.  
長野県埋蔵文化財センター 2000a『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19 郷土遺跡他』.  
長野県埋蔵文化財センター 2000b『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5 松原遺跡』.  
長野県埋蔵文化財センター 2012『濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群』.  
賛田明 2000「第2章第6節 人面付土器を出土した竪穴住居址」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5—松原遺跡 弥生・総論 1』長野県埋蔵文化財センター.  
橋本裕行 1997「弥生人の顔」『考古学ジャーナル No416』.  
林幸彦 1994『西一本柳遺跡Ⅰ』佐久市教育委員会.  
常陸大宮市歴史民俗資料館 2009 企画展「再葬墓と人面付土器のふしぎ」企画展示解説.  
平野進一 2001「北関東西部における弥生後期の人面付土器とその性格」『考古聚英 梅澤重昭先生退官記念論文集』.  
平野進一 2004「土人形の謎」『群馬の遺跡 3 弥生時代』群馬県埋蔵文化財調査事業団.  
前田清彦 2009「土偶形容器と人面付土器」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会.  
松本市教育委員会 2001『百瀬遺跡Ⅳ』.  
諸田康成・水田稔 2008「群馬県利根郡川湯村出土の人物形土器について」『研究紀要 26』群馬県埋蔵文化財調査事業団.  
宮本敬一 1999「三嶋台遺跡出土の人面付土器」『市原市郡本周辺の遺跡と文化財』市原市地方史研究連絡協議会.  
森泉かよ子 2010『西一本柳遺跡XIV』佐久市教育委員会.  
八重樫純樹他 1996『中部高地をとりまく中期の土偶』「土偶とその情報」研究会.  
和歌山県教育委員会 2013『大日山 35号墳発掘調査報告書』.  
掲載図・写真は各報告書等の文献より引用した。

私が金沢大学考古学研究室を卒業したのは平成元年3月のことであり、早いもので四半世紀がたったことになる。40周年を迎えた研究室の益々の発展を祈念申し上げたい。